



現代日本語における助詞「ト」の研究：引用の周辺にある「ト」を中心に

著者	金 賢娥
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6766号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122261

氏名（本籍）	金 賢娥（韓国）
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 6766 号
学位授与年月日	平成26年 3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代日本語における助詞「ト」の研究 ——引用の周辺にある「ト」を中心に——

主	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本 武
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川 有里子
副	査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	竹沢 幸一
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	矢澤 真人

論 文 の 要 旨

本論文は、並立助詞、接続助詞、引用助詞、副詞の語尾など文内での様々な機能に基づいて分類されてきた「ト」の中でも、従来、「引用助詞」という大きな枠の中で扱われてきた類の「ト」の中に、いわゆる引用助詞とは文法的・意味的に異なる「ト」が混在していることを指摘し、その「ト」を引用助詞と区別して位置づけることを目的としたものである。この点で、本研究は、引用の周辺にある助詞「ト」の問題を扱った研究と言える。

従来の引用の研究において、引用の周辺にある「ト」に関する研究は、大きく引用研究、「ト」が生起した構文の研究、そして助詞研究に分けられるが、それらの研究の中では、具体的な構文で「ト」の性質がどのように異なっているのかという問題までは扱われてこなかった。しかしながら、表面上引用構文と類似した次のような構文に生起する「ト」を観察してみると、明らかに引用を表すものが存在する一方、典型的な引用助詞とは異なる、いわば「同一化」と呼べるような「ト」も存在する。

- | | |
|--------------------------------|--------|
| (1) 太郎はお早うと{言った/思った}。 | (引用) |
| (2) 太郎はお早うと入ってきた。 | |
| (3) 政府は来年度の予算を12月に発表するとした。 | |
| (4) 先生は太郎を犯人だと{言った/思った}。 | |
| (5) 最近の出版社は読者を消費者とみなしているようである。 | |
| (6) 先生は定員を10名と限った。 | (同一化) |
| (7) このクラスは予習を基本とする。 | (複合形式) |

そこで、本論文では、引用の周辺にある文に注目し、一見、引用構文のように解釈される文であっても、そ

ここに現れる「ト」が引用助詞とは異なった文法的・意味的性質を持ったものであることが論じられる。そして、「引用」という広義のカテゴリーを表すとされてきた「ト」が、文をとり引用を表す「ト」と名詞をとり「同一化」を表す「ト」という異なったものとして位置づけられる。

論文の構成は、以下の通りである。

本論文は、全7章から成り、第2章と第3章で「引用のト」について論じられ、引用の「ト」の性質を明らかにした上で、それと比較して、第4章から第6章で「同一化のト」との相違について論じられる。

第1章では、本論文の背景と研究目的を述べた上で、先行研究の問題点を指摘し、本論文の立場が示される。

第2章では、引用を表す「ト」に関する先行研究をもとに、「ト」がとる成分、名詞句中に現れる「という」と「との」、「ト」のかき混ぜを取り上げ、「引用のト」の振る舞いが記述される。また、「ト」としばしば比較される「コトヲ」を取り上げ、「ト」との意味的な違い、「引用のト」の補文化形式としての性質が明らかにされる。ここで示された「引用のト」の性質をもとに、第4章以降で取り上げられる「同一化のト」の性質が検討される。

第3章では、藤田(2000)が第II類引用構文と呼ぶ(2)のような文を取り上げ、藤田(2000)の主張と異なり、とりたて詞の付加、テ形節との意味的な類似性などの、いくつかの文法的・意味的現象から「ト」の後には発話行為を表す動詞が潜在しており、複文構造を成していることが主張される。また、このタイプの引用構文で「言って/思って」が潜在化できる原因について「引用のト」や「言う/思う」の性質から説明が与えられる。これは、「引用のト」の「別の場を作り出す」という性質に基づくものであり、第4章以降で述べる「同一化のト」を「引用のト」から区別する基準になる特徴でもある。

第4章では、(6)に見られるような引用助詞とは異なる「ト」を取り上げ、これらの「ト」が「同一化のト」として統一的に説明されることを主張し、かき混ぜの現象などから「同一化のト」の文法的振る舞いが示される。さらに、「同一化のト」は、名詞句と名詞句を等価なものとして対応付けるコピュラ相当のものであり、「引用のト」、そして同じくコピュラ関係を表わすとされる「ニ」「デ」とも異なった振る舞いを見せることが示される。

第5章では、従来、引用構文から派生したとされてきた(4)(5)のような「NP1ヲNP2ダトV」型構文と「NP1ヲNP2トV」型構文を取り上げ、共起現象などの文法的性質の違いや名詞句の意味解釈の違いから、「NP1ヲNP2トV」型は「NP1ヲNP2ダトV」型とは異なる構文であり、それぞれの構文に生起する「ト」の性質も異なり、後者の「ト」は「引用のト」、前者の「ト」は「同一化のト」であることが示される。

第6章では、(3)(7)のような「トする」構文を取り上げ、「文+トする」構文と「NP1ヲNP2トする」構文の相違や、「トする」構文と「ニする」構文の相違について考察し、「ト」は「ニ」のように本質の変化を表すものではなく、同一化を表す形式であることが主張される。第6章での議論は、第2章と第3章で述べた「引用のト」と、第4章と第5章で述べた「同一化のト」を、「トする」構文に照らし合わせた分析であり、第2章から第5章の考察を通じて述べられた主張、すなわち、文をとる「ト」は「引用のト」であり、名詞をとる「ト」はコピュラ相当の「同一化のト」であることをさらに根拠付ける内容として位置づけられる。

第7章では、本論文の議論をまとめ、今後の課題について述べる。

審査の要旨

1 批評

日本語の引用助詞は、従来から活発に研究が行われてきており、藤田保幸氏、砂川有里子氏、鎌田修氏、阿部二郎氏などの研究により、かなりの成果があげられてきている。それに対して、本論文は、従来、引用

の「ト」の一種として、あまり注目されてこなかった類の「同一化のト」を取り上げ、詳細にその文法的、意味的性質を記述し、「引用のト」との違いを明らかにした、これまでにない研究であり、その点で、従来の引用研究と助詞研究にまたがる問題を扱うものになっており、今後の引用研究、助詞研究の両者に貢献するものであると言える。

具体的には、「同一化のト」が現れる構文の分析に際しては、従来のように特定の動詞に限らず、数多くの動詞について詳細に検証を加え、丹念に文法的、意味的現象を探り出している点で、実証性の高い研究になっている。また、「同一化」という概念も、「引用のト」との違い、コピュラ関係を表す「ニ」「デ」との違いを丹念に検証することによって、その違いが明らかにされ、「同一化のト」を特立することに成功している。

それとともに、第3章で取り上げられる「発話動詞の潜在化」の現象は、従来、単に通常の引用と同様に扱われていた構文について、とりたて詞が付加しないこと、テ形節と同様な意味解釈を許すことなど、興味深い言語事実を指摘し、そこから、発話動詞が潜在していることを主張したことで、引用研究に関しても新たな知見をもたらすものになっている。

このように、本論文は、「同一化のト」を詳細に記述したのみならず、引用研究および助詞「ト」の研究に新たな方向性を示した点で評価できる一方、いくつかの課題も残されている。まず、第一に、「同一化のト」を「引用のト」から切り分けたものの、助詞「ト」全体の中での「同一化のト」の位置づけは、未だ明確にはされていない。また、「同一化のト」について、「ニ」「デ」との違いは明確にされたものの、「同一化」という概念自体はまだ十分に明示的であるとは言い難い。第二に、発話動詞の潜在化の現象は、現象の記述としては妥当であると考えられるものの、発話動詞の潜在化というものが統語的にどのように扱われるのか、また、それに伴い、とりたて詞が付加できないことが原理的にどのように説明されるのかという点については議論がなされていない。しかしながら、第一の問題は、助詞「ト」自体の機能が多岐に渡るが故の困難さによるものであり、本論文は、助詞「ト」の解明に一定の方向性を与えるものになっている。第二の問題は、引用それ自体のみならず、とりたて詞などの他の文法現象の分析にも関わるものであり、本論文の成果によって、さらに研究が進展していくことになるものである。このように、上記の問題も、むしろ本論文の発展性を示すものであり、本論文の価値を何ら損なうものではない。

2 最終試験

平成26年1月21日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。